

山上の説教本論第II部：偽善者の義（施し・祈り・断食）6：1－18

- 1) 先の対立命題が律法学者を念頭においていたのに対し、ここでは人々の偽善ぶり、おそらく文脈から考えてファリサイ派の人々の振る舞い、ユダヤ人にとって慣れ親しんだ敬神のわざである施し、祈り、断食が取り上げられる。この部分の構成は分かりやすい。

主題を表す文「見てもらおうとして人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないとあなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる」（7：1）に続いて、人々が重視する施し・祈り・断食という敬神のわざについてほとんど同じ論旨、順序で述べられている（2－4，5－6，16－18）。なお、祈りについての部分に導入と敷衍部分を伴う〈主の祈り〉が挿入されているが、これはマタイによる挿入であることは明らかである。この7－15を省いても6－16節への続き具合に影響はない（この部分については、次回に別の観点から触れる）。

2) 隠れた施しとは

施し・祈り・断食それぞれについてのイエスの指示の意味を取り違えることはまずないとしても、わたしたちの生き方として受け取るならいくつか問題を生じる可能性はある。

なぜ徹底して〈隠れて〉と強調するのか？

- ・偽善者一元来、演技する者
- ・〈右の手のすることを左の手に知らせるな〉？自分のうぬぼれ、自分を眺める視線から開放されうるか？
- ・日本人は、隠れて行うことは出来ても、ことのほか他の人の目を気にする。

→イエスの〈隠れて〉は、〈隠れて〉も〈あらわに〉も相対化されて、ただ助けを必要とする人と向き合うことの重要性を伝えている。

3) 「隠れた祈り」とは

- ・〈会堂や大通りに立って祈りたがる〉とは
- ・「奥まった部屋に入って、戸を閉めて」とは
- ・だが、自分の視線、うぬぼれから隠すことができるか？（〈よく祈れた〉、〈上手く祈れない〉などの区別に意味があるか？

4) 〈頭に油をつけ、顔を洗って断食する〉？

- ・この指示は何を言いたいのか、困ってしまうが、〈顔を見苦しくして〉の断食との対比だと考えれば、〈さっぱりした顔で〉くらしいの意味か？あるいは〈お祭りに出かける時のように〉といった学者もいる。
- ・断食は神への立ち返りのわざだとすれば、他人の目などかわりないこと。神への立ち戻りは大きな喜びの行いでもあろう。

本論第三部

山上の説教の〈見出し〉に当たる5：20を基本に本論を「律法学者の義」、〈ファ
「ファリサイ派の義」と区切る立場（ヨアキム・エレミアスなど）からは、残りを一括して「あなた方の義」、つまりキリスト者の義を扱う部分とみなすことが出来る。他の学者は、7：12でまとまるとみなし、残りを結びの勧告としてまとめ、二つに分ける人もいる。またさらに細かく分ける人もいるが、ここでは一つのことのみを指摘しておく。

「律法と預言者」と言う表現が示唆するもの→山上の説教では、この表現は本論に先立つ5：17とここでのみ用いられている。つまり聖書全体を意味するこの表現は囲い込みの役割を果たしている。（別紙資料、「山上の説教の構成」参照。）

「思い煩うな」とは（6：25-34）

①イエスは二通りの比較で何を言いたいのか？

空の鳥は種まき、刈入れ、蔵に収めること（すなわち食べ物確保のための一連の農作業）をしない。

野のゆりは、働く、つむぐ、すなわち糸をつむぎ、それで布を織り、家族の衣服を作ること（家庭の主婦の仕事）をしない。

イエスが「思い煩うな」というのは生きるうえで不可欠の次元でのこと。十数年は自ら額に汗して生活の糧を得てきたイエスだとすれば、「そんなにあくせくしなくても生きられるよ」と言うことではあるまい。

②「思い煩う」ないし「思い患う」はついには人の心を患わせるような思い悩みのこと。

その要素は、イ) 当人には重大なことないしどうしても必要なこと、ロ) 自分で整えなければならず、しかも何とかできると思われること。（自分の力をはるかに超えることについては、他人の助力を求めるか、あきらめるだろう）。

③「何を食べ、飲み、何を着るか」が何故「信仰」の問題になるのか？

生きる糧を得る為の働きも、着るものを家族のために配慮することも必要なことで、イエスはそれを否定しているわけでもあるまい。でも、必要に追われるうちに、食べ物や着る物、つまり生きるのに必要なもの、したがっていのちを「自分の力でまかない、そうできると思い込む」ことはある。イエスは、「それは違う。もっと大きい、広い配慮の中で人間の努力がある」ことを語っている。

④この語りかけの相手は？

ルカの「平地の説教では」・・・弟子たちに（11：2参照） → 「ただ神の国を・」

マタイの山上の説教では・・・弟子たちを含む群衆（5：1参照） → 「まず、神の国とその義を求めよ」

⑤では、わたしたちは？ →自分の工夫や働き、労働の対価である給料で整えた食卓を前に「この食事を与えてくださったことを感謝いたします」と祈る。自分たちの努力を尽くしながらも、その実りがおん父の大いなる配慮の賜物であることを知る者の謙虚な、信仰告白